

氏名	盧 賢 珠
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	文 学
学位授与番号	博甲第2321号
学位授与の日付	平成14年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	現代日本語における評価成分の研究
論文審査委員	教授 下河部 行輝 教授 工藤 進思郎 教授 辻 星児 助教授 江口 泰生 大阪外国語大学外国語学部教授 仁田 義雄

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は現代日本語における話し手の評価として現れる言語の諸形式についてその評価成分を論じたものである。A4版のワープロ打ちで200頁、四百字の原稿用紙に換算して約七百四十枚に相当する。既発表の論文と口頭発表を中心に纏め、さらに用例を追加しながら新たに章・節を加えて全体を統一したもので、序章から八章に及ぶ。

序章 この論文の目的と先行研究を概観して国語学と言語学における評価成分についての研究について論評している。そして日本語における文副詞の意味・機能について注意が払われていない指摘をして本研究の必要性を説いている。

第1章 評価成分の成立条件と基本的な性質

「珍しく・珍しくも」(以下「一φ・一も」)「嬉しいことには」(以下「一ことに(は)」)「残念ながら」(以下「一ながら」)形式と「評価の副詞」が意味上・構文機能上、独自の領域を持つものであることを示し、かかる意味上・構文機能上の特徴から評価成分の基本的な性質について論述している。評価成分を含む文は、文構造から評価成分とその評価の根拠となる評価対象とからなるとする。この評価対象の部分は既に実現・確定された出来事や事態を描写・説明することをその表現の主旨とする文である。評価成分はこのような文に限って用いられる物であるとする。

第2章 評価の「一φ」「一も」について

評価成分の諸形式の中で、もっとも注目されてきた「一φ・一も」について考察している。「一も」型評価成分は、「も」の付加が任意的なものとならざるものがあり、この事実について形容詞の語彙的特徴(命題全体にかかわり得る形容詞であること)と評価成分に付加する「も」が標示するものを中心として論じている。

第3章 評価成分の「一ことに(は)」について

渡辺実(1971)、中右実(1994)以来、工藤浩(1997)で現在もっとも生産的な形式として捉えられている「一ことに(は)」形式について考察している。

「一ことに(は)」の特徴は、形式が示している通り、感情や評価を表す形容詞を客観的事態あるいは事柄を表す名詞とされる「こと」によって、抽象化して表現するところにあるとする。このような特徴によって、「一ことに」は、語彙的特徴、主題を表す「は」の

付加、程度副詞の修飾、複文における評価の範囲など、「一 ϕ ・一も」形式の評価成分と異なっていると。特に複文の場合、評価の範囲が主節まで及ぶ傾向があるが、そのような特徴は「一は(提題)」構文と構文的に類似する点を持ち、「一ことに」そのものに提題機能があるような結果がでたとしている。

第4章 評価成分の「一ながら」について

従来、「残念ながら」「失礼ながら」などのような「一ながら」が、同範疇のものとされる「残念にも」「残念なことに」のような「一く・にも」「一ことに」形式と異なって、推量、意志、依頼、さらに、疑問文にまで現れ得るという現象を、「一ながら」形式に对人関係的な配慮が関与する形式ではないかということに注目して、对人配慮の在り方について検討している。その結果「一ながら」には「残念ながら」「面倒ながら」のように評価性と对人関係的な配慮とが重なりあっているものと、「恐れながら」「恐縮ながら」などのように評価成分としては捉えにくく、对人関係的な配慮が主な意味合いとなるものがあるということが観察され、「一ながら」は、对人関係的な配慮が深く関わっている形式であるということを示している。

第5章 評価成分の各形式の相互関係

この章は、2・3・4章で得られた成果を踏まえて、同類でありながら、異なる形式を示す「一 ϕ ・一も」「一ことに」「一ながら」といった諸形式の形式間の相互関係を体系的に考察している。その結果、この諸形式は、語彙的特徴、接続詞との関係、程度副詞の修飾、助詞「も」「は」の付加、複文における評価の範囲、文末のモダリティ形式との共起関係から相違が見られ、「一も」は事柄に対する期待、予想、願望などを前提にし、驚き、意外などの情意性が関わるもの、「一ことに」は感情や評価を主題提示のように表すということで、この両形式間には命題に対する話し手の態度による使い分けがあることを明確にしている。また、「一ながら」は、对人関係的な配慮にも関わる形式として、いわゆる代表的な評価成分「一 ϕ ・一も」「一ことに」との関わりから考えた場合、異質な存在でもあることを明らかにしている。

第6章 評価成分と評価副詞との関係

第5章で踏まえた評価成分の諸形式の特徴に基づいて「せっかく」「あいにく」「さすが(に)」のような評価の副詞との関係について論じている。その結果、評価の副詞には、事柄の評価で終わる「あいにく」類と、事柄の評価で終わらず、新たな展開をする「せっかく」類とに分かれることを論じている。さらに、この評価の副詞には、第5章で論じた对人配慮が関わるもので、評価性と对人配慮とがどのような関係にあるのかについても言及している。

第7章 評価成分のモダリティ研究における位置付け

文の陳述性に関わる副詞的成分と文の階層性から見た評価成分とについて論じている。ここでは、これまで述べてきた諸形式の個々の特徴に基づいて、日本語のモダリティ論における位置付けを諸形式に当てはめている。評価成分は〔言表事態めあてのモダリティ〕に属するもの、〔言表事態めあてのモダリティ〕と〔発話・伝達のモダリティ〕にまたがるもの、〔発話・伝達のモダリティ〕に属するもの、があると考えることができるとしている。

第8章 おわりに

第1章から第7章までの要約をしている。第1に、日本語における評価成分の代表的な形式は「一 ϕ 」「一も」「一ことに」であり、また評価の副詞は「ことがら評価」専用の「あいにく」類と、「ことがら評価」で終わらず、実現願望、惜しみ、詠嘆等の表現に繋がる「せっかく」類とがあることを示している。第2に評価成分の諸形式の意味・機能の相違から、その一部に「あいにくですが」などのように対人配慮という居質的な意味合いがあること、第3に「も」「は」「ながら」の付加されるこれらの助詞について、助詞全体の中でどう位置づけるべきかは今後の問題としている。第4に、評価成分は日本人自身についてもあまり内省がきかないものであることを指摘している。さらに多くの事例の検討が必要とするとしている。今後も評価成分とそれに関わる助詞とについて一層深めていきたいとしている。

論文審査結果の要旨

学位審査会は、2002年2月4日、学内審査委員4名・招聘審査委員1名によって行われた。審査の結果は以下の通りである。

本論文は、現代日本語における評価成分について、その文法的特徴を体系的に、かつ可能な限り詳細に記述しようとしたものである。従来、話し手の評価、判断等は文末の研究が主であったが、評価の副詞とともに文頭における評価成分を網羅的に収集し、それらを体系的に考察し結論に至った成果は当該研究の発展に寄与しうるものと評価できる。

本論文で評価成分として取り上げた「幸いに(も)」「面白いことに(は)」「遺憾ながら」(以下「一 ϕ ・一も」「一ことに(は)」「一ながら」)のうち、「一ことに(は)」が現代日本語で最も多く表現されており、次に多く表現されているのは「一も」であり、「一 ϕ 」「一ながら」が数量的に少数であることも結果的に明瞭になった。

「一 ϕ ・一も」「一ことに(は)」「一ながら」と評価の副詞とが意味上・構文機能上、独自の領域があることを明らかにし、その特徴から評価成分の基本的な性質を述べている。評価成分の含まれる文は、文構造から「評価成分」と「評価の根拠となる評価対象」とから成り立つとし、その評価対象は表現の本体として既に実現・確定された出来事や事態を描写・説明することを表現の主旨とする文であり、そのような文に限って評価成分は用いられるという結論は文研究にも寄与出来るものである。評価成分と共起出来る文末表現は限定されることも明らかにしたといえる。

評価成分の中で最も注目されてきた「一 ϕ ・一も」形式の「一も」型評価成分は、任意性のあるものと無いものがあり、評価成分の「も」は、話者がなんらかの期待、予測、願望などをもち、この前提によって、驚き、意外性、安堵感等の意味が派生するものであると結論している。また「一ことに」は「一 ϕ ・一も」とともに判断段階とするには問題があるという従来の論に対して新しい見解を提示した。

「一ことに」に「は」の付かないものを検討して、複文の用法では、さまざまな接続形によりつながられている従属節を超え評価の範囲が主節まで及ぶ傾向があることを指摘しているが、及ぶことが半断しにくいものもあり、今後更なる検討が必要であろう。

「一ながら」形式において「残念ながら」のような評価性と対人関係的配慮が重なるものの類と「恐縮ながら」のような評価成分としては捉えにくく、対人関係的配慮が主な意味合いとなるものの類とに分かれることを意味用法上から指摘したのは評価できる。さらに「一ことながら」と「一ながら」とは「一ことながら」が「一ことに」に全て置き換えられるのに対して「一ながら」は置き換えられないものがあって、区別されるべき表現形式であるとした点も新しい見解であろう。

評価の副詞は、その意味的特徴によって、ことがら評価専用のものと、その評価だけに終わらず、後件への展開を見せるものに分けうるとして、前者を「あいにく」型、後者を「せっかく」型としているが、それぞれの範疇に納まる副詞が僅かである一面がある。

「一も」については「語性で」という言い方では曖昧さが残るし、一部の例で推測するところもあり、それぞれもっと多くの事例の収集と考察の必要性が要求される。

論文の内容は新たな見解が多く、学会に寄与するものとして、審査委員会は以上の事柄を総合的に判断して、本論文を学位論文として認定することに全員一致で合意した。